94歳の利用者の退院後の生活をどう支えていくか

スーパーバイザー

野中　猛（日本福祉大学教授）

事例提出者

Ｙさん（居宅介護支援事業所・看護師）

提出理由

クライアントは高齢者世帯（94歳の母と73歳の息子）で、ともに要介護状態（母：要介護４、息子：要介護１）にある。母親は現在、褥瘡の悪化により入院中。妻の死亡により１年前から主介護者となった息子には、てんかんの発作がある。

母親は退院後は自宅に戻りたいと考えているが、息子の病状や今後の生活について不安を抱いている。一方、息子は母親の病状悪化に対する受けとめ方が薄く、必要な介護を受け入れない。

今後の生活の支援方法について検討していただきたいと思い、提出した。

事例の概要

・クライアント

Ｎさん（94歳・女性・要介護４）

Ｚ氏（Ｎさんの長男・73歳・男性・要介護１）

・病歴等

Ｎさん：狭心症、気管支喘息などの既往がある。平成９年頃より腰痛の悪化により徐々に歩行困難となる。外出時は車いすにて移動。平成16年４月、６月、８月には、転倒や病状の悪化により、それぞれ２週間程度入院。同年10月、転倒により皮膚を損傷、通院治療をしていたが、年末に腰椎圧迫骨折にて２週間入院。その後、退院し自宅療養していたが、褥瘡の悪化により１カ月前から再び入院している。退院の目途は立っていない。

・生活歴

40年ほど前までは呉服屋を営んでいたが、その後店はたたみ、アパート経営で生計を立ててきた。３人の子どもを育てる。長女と次女が嫁いでからは長男（Ｚ氏）一家との同居生活となる。しだいに孫たちも独立し、20年ほど前からは長男夫婦との生活となる。その後、10年前に夫が死去し、１年前には主介護者であった嫁（Ｚ氏の妻）が亡くなった。以後、Ｚ氏が主介護者を務めることとなったが、Ｚ氏自身要介護状態であり、困難な生活状況となっていた。

・経済状況

年金（国民、遺族）：２人で20万円／月

その他、アパートの賃貸収入もある模様（詳細は不明）

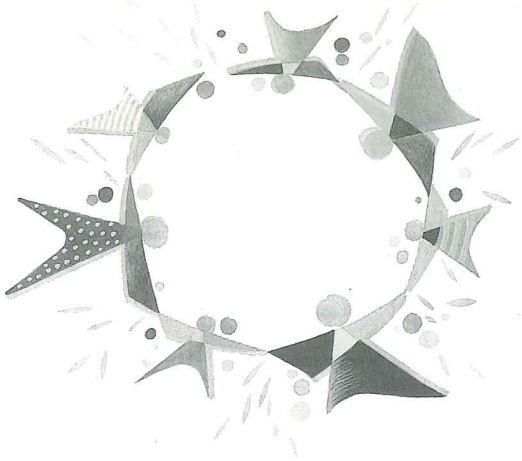
・家族状況

長男（Ｚ氏・73歳）、長女（68歳・遠方の他県に居住）、次女（60歳・隣市に居住）

・現在利用しているサービス（入院前）

訪問介護：毎日３回（身体①朝：30分・起き上がり介助・排泄介助、昼：起き上がり介助・排泄介助、夕：排泄介助・清拭などの保清援助・夕食の調理と配膳）

デイサービス：週２回（以前、デイケアやショートステイも利用したことがあるが、本人は気に入らな



全国各地で行われている事例検討会の模様を誌上で再現します。検討会及び事例の内容は、プライバシー保護の観点から、全体の趣旨に差し支えない範囲で変更させていただきました。

かった）
福祉用具貸与：特殊寝台、エアーマット

身体状況等

健康状態：現在は褥瘡処置等のため入院中。腰痛はあるが、病状は安定している。
ＡＤＬ：着替えは一部介助。椅子の生活でつかまり立ちができる。平らな場所であれば歩行器などを使って移動可。
認知：問題なし
コミュニケーション能力：やや難聴があるが、日常的な会話は問題なくできる。
社会とのかかわり：入院前は息子と２人の生活。時々次女や孫の訪問があるが、近所との付き合いもないため、週２回のデイサービスをとても楽しみにしていた。
排尿・排便：ベッドサイドのポータブルトイレにて行っていた（ヘルパーによる介助）。自宅トイレまでは段差があるため移動が困難であり、間に合わないので利用していない。
褥瘡・皮膚の問題：平成16年末の腰椎圧迫骨折以降、コルセットを装着。退院後、在宅にて寝たきり状態に近かったため仙骨部に褥瘡（４cm程度のびらんあり）ができ、自宅での処置ができないため入院治療中。少しずつ軽快してきている。
口腔衛生：洗面所まで介助で移動できれば、義歯の洗浄は何とか自分で行う。
食事摂取：座位をとれば自己摂取可能。
問題行動：なし。
介護力：息子（Ｚ氏）は自身の病気や体力的な不安から薬の管理と食事の準備を行うのみ。排泄介助等の直接的な介護はヘルパーが行っている。
居住環境：古い造りの民家。玄関の上がりかまちや居室までに段差が多い。
その他：

- 本人は息子（Ｚ氏）の病気のことと今後の生活について不安を抱いている。
- 息子（Ｚ氏）は妹たちや孫（Ｚ氏の子ども）に対し介護の一部を担ってもらうことは期待していない。
- 妹や孫は息子（Ｚ氏）に対して意見を言えない雰囲気がある。
- 入院中（現在）は、毎日次女や孫が見舞いに来ている。

ケース検討会

野中　ありがとうございました。94歳の超高齢のお母さんと70歳を超えた息子が二人で暮らしていたけれども、お母さんは現在、褥瘡治療のために入院中、息子はてんかんの発作があり、要介護１というケースです。これからこの家族を支援していくためには、どんな支援をしていったらよいでしょう。

まずは、見立て（アセスメント）をもう少し深めていきましょう。主観を交えずに事実を聞いていっ

てください。ある程度の情報がそろったところで、手立て（プランニング）を考えていきたいと思います。では、質問をどうぞ。

ケースの全体像をつかむ（見立て編）

入院前の生活状況、ケア状況について

発言　お嫁さんが1年前に亡くなり、息子さんが主介護者となったということですが、お嫁さんがお元気だった頃は息子さんはお母さんの介護にはかかわっていなかったのですか？

Yさん　息子さんご自身も病気や体力面で不安があるので、ほとんどお嫁さんが一人で介護をしていたようです。

発言　お嫁さんはどんな亡くなり方を？

Yさん　検診で内科にかかった時にがんが発見され、精密検査をしたらもう手遅れだったということです。発見から亡くなるまで4カ月ほどで、本当に急な話でした。

野中　お嫁さんが亡くなるのと、お母さんが転倒し始めるのは、どちらが先ですか？

Yさん　お嫁さんが介護をしていらした頃は転倒はありませんでした。転倒するようになったのは、お嫁さんが亡くなられてからです。

発言　息子さんは要介護1ということですが、ケアマネジャーはどなたが担当しているのですか？

Yさん　私がお二人とも担当しています。

発言　息子さんの病状はどんな状態なのですか？

Yさん　ご自身の身の回りのことは自分でできるのですが、若い頃からてんかんの持病があります。薬を毎日3回服用しているのですが、最近は介護疲れもあるのか時々小発作を起こしています。

発言　薬は現在の状態に応じた処方になっているのですか？

Yさん　いちど大きな発作があったときに、「先生にしっかり診てもらってください」とお話しして受診していただいたことがあるのですが、それまでの処方とほとんど変わらない内容でした。

野中　別の医者にも診てもらうという方法もありますけどね。

Yさん　長くかかっているお医者さんなので、別の病院に行く気はまったくないようです。

野中　何十年の付き合いでしょうからね。ただ、もう少し医師との交渉は必要かもしれませんね。

発言　入院前は夕食はヘルパーが作っていたようですが、朝食と昼食はどうされていたのですか？

Yさん　息子さんが調理をしていました。ただ、慣れていないこともあって時間がかかってしまい、朝は8時くらいに起きて準備にかかるのですが、出来上がるのが9時くらい、食事が終わって片づけるともう10時半頃で、すぐに昼食の準備をしなければならない、というパターンになっていました。

野中　どんな料理を作っているのでしょう。私なんかパンだけですから、3分で終わりますよ（笑）。

Yさん　朝はご飯を炊いて、味噌汁を作って――。

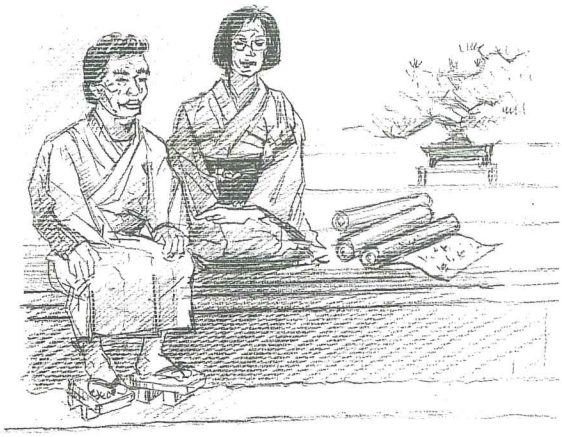
野中　味噌汁はインスタントじゃないのですか？

Yさん　はい。ちゃんと味噌を溶いて、具も用意して作っていらっしゃいました。

野中　それはもちろん悪いことではありませんが、時間がかかりすぎて食事の準備に追いまくられているようでは、普通の生活とはいえませんよね。今どきのインスタントは味もちゃんとしていますよ。そういう方法もありますよ、と勧めないのですか？

Yさん　お勧めはしました。でも、「買いに行くより自分で作ったほうが安い。そんなにかけられない」と受け入れていただけませんでした。電子レンジ料理や配食弁当などもお勧めはしたのですが……。

野中　買ったほうが絶対に安いと思いますけどね。もしかすると、最近のコンビニを知らないのかもしれませんね。いちど品揃えや値段を見ていただくといいんですけどね。



発言　ご本人は入院前に利用していたデイサービスは気に入っていたようですが、デイケアとショートステイが気に入らなかったのはどうしてですか？

Yさん　デイサービスはＮＰＯが運営しているところで、こぢんまりとして明るくワイワイ話ができる雰囲気なんですね。それでご本人も気に入っていたのです。お風呂も檜風呂があったりして。一方のデイケアとショートステイは同じ施設なのですが、定員も多く、認知症の方や要介護度の高い方も少なくないので、デイサービスとは雰囲気もかなり違います。それで、ちょっと合わないと感じたようです。

家族介護力について

発言　お嫁さんが亡くなってから、妹さんたちが介護にかかわるということはなかったのですか？

Yさん　長女は遠方で生活していますので、日常的な介護力としては期待できません。次女は今も頻繁にお見舞いに来られるなど、お母さんに対する気持ちはあります。ただ、長男が次女に対して遠慮というのか、実際的な介護をさせることまではできないと思っていらっしゃるようなんです。

野中　次女はどこに住んでいるのですか？

Yさん　隣の市です。実家までは車で30分ほどの距離です。

野中　家族構成は？

Yさん　ご主人とＯＬをしている娘さんが２人いらっしゃいます。娘さんたちは２人とも独立して家を出ています。ご主人は定年後に子会社の重役に迎えられ、今は単身赴任をしておられますので、実質的にはひとり暮らしという状況です。

野中　次女は何か仕事をしているのですか？

Yさん　自宅近くの学習塾で先生をしています。

野中　毎日、朝から晩まで忙しいのかな？

Yさん　担当のコマ数はそれなりにあるようですが、朝から晩までというほどではないと思います。

野中　カリキュラムが決まっているということは、自由になる時間もあらかじめ計算できるということですよね。時間的にはかかわれないわけではなさそうですね。

Yさん　次女さんとお話しすると、「最終的には私がみなくちゃいけないと思っています」とおっしゃるのですが、息子さんのほうに「そこまで迷惑はかけたくない」という思いがあって……。

野中　なぜ、そこまで強く思っているのかな。

Yさん　もともと、いわゆる旧家の長男ということもあって、自分が家を継いだのだから親の面倒もみなければという意識が強いのだと思います。

発言　お母さん自身は、娘さんのかかわりについてどう思っていらっしゃるのですか？

Yさん　ハッキリと伺ったことはないのですが、病院にお見舞いに来てくださるのはとても喜んでいらっしゃいます。

発言　お孫さんもお見舞いに行っているようですが、近くにお住まいなのですか？

Yさん　息子さんには２人お子さんがいますが、お兄さんのほうは他県で働いていて、滅多に実家には帰ってこないようです。病院にお見舞いに行っているのは妹さんのほうで、この方は同じ市内に住んでいらっしゃいます。

発言　結婚されているのですか？

Yさん　いいえ、まだ独身です。栄養士として大きな企業に勤めておられるようです。

発言　息子さんはお孫さんにも介護を手伝ってもらう気はないのですか？

Yさん　妹さんに対してと同じような気持ちなのではないかと思います。

生活歴について

野中　生活歴を確認しますが、ご本人のもともとの出身はどちらですか？

Yさん　地元出身の方です。

野中　呉服屋さんは自分の実家ですか？

Yさん　いえ、亡くなったご主人の実家です。ご本人は嫁いでこられました。

野中　ご本人のごきょうだいや親戚は？

Yさん　ごきょうだいは皆さん亡くなられています。親戚づきあいはほとんどないようです。一度も話を聞いたことはありません。

野中　ご本人の学歴はわかりますか？

Yさん　女学校を出ておられます。

野中　90代で女学校卒だったら、かなりの高学歴ですね。実家はきっと裕福で、いわゆる家柄も高かったんじゃないかな。そんな人が嫁ぐくらいですから、ご主人の実家も相応の旧家なんでしょうね。

Yさん　ご主人の代になってお店は閉めましたが、かなりのお家だったようです。

野中　店を閉めた後はアパート経営で食べていたということですが、どんなアパートなんですか？

Yさん　直接見たことはないのですが、息子さんの話では、かなり古いアパートで、あまりたくさん収入が入ってくるような感じではありませんでした。

野中　金銭感覚は人によって違いますからね。金持ちほどお金にシビアなものですよ。少なくとも土地だけでもそれなりの資産価値はあるでしょう。

Yさん　たしかに……。

野中　いずれにしても、アパート収入で暮らしていたということは、かなり自由になる時間がありましたよね。ご本人は何を楽しみにして暮らしていたのかな。そのあたりは聞いていますか？

Yさん　ご主人と年に2回は旅行に行っていたとか、娘さんがピアノを習っていて、コンサートに行くのが楽しみだったといった話は聞いています。

野中　それはイベントですよね。もう少し日常のなかの趣味のようなものは聞いていませんか？

Yさん　すみません。聞けていません。

野中　この人がどんなことにエネルギーを傾けていたのかがわかると、もう少し人となりが浮かび上がってきますし、これからの生活を支えていく際のヒントも見えてくることがあります。昔のアルバムなどを見せてもらうと、いろいろな発見があるかもしれませんよ。

Yさん　なるほど。今度チャレンジしてみます。

退院後の生活について

発言　退院後、ご本人が在宅に戻った場合はどんな介護が必要になりそうですか？

Yさん　最低限、入院前と同様に起き上がり介助、排泄介助、車いすへの移乗介助などは必要になります。その他、入院により身体機能が落ちていれば、その他の援助も必要になるかもしれません。

野中　相当本気にならないと在宅での介護はできま

せんね。息子さんはどう考えているのですか？

Yさん　自分でできるのは見守り程度で、実際に手を出すと自分もよろけてしまうのではないかという心配があります。ですので、これまで同様、実際的な介護はヘルパーさんにお願いしたいと考えておられると思います。

発言　提出理由のなかで、息子さんはお母さんの「病状の悪化に対して受けとめ方が薄く、必要な介護を受け入れないでいる」とありましたが、これはどういうことですか？

Yさん　たとえば、褥瘡ができかけたときに往診の先生を紹介したり、訪問看護の話をしたのですが、「わざわざ先生に来てもらうまでもない」とか、「訪問看護は料金が高い」ということで断られたことがあります。

野中　先ほどの料理の話とも共通しますが、お金が出ていくことに対して抵抗が強いようですね。

Yさん　そうなんです。

野中　でも、退院後はお母さんを自宅で暮らさせてあげたいと思っているのですか？

Yさん　実は今回の入院前に、やはり自宅での介護はキツイということになって、施設入所を模索したことがあります。老人保健施設の空きをようやく見つけて入所寸前まで話が進んでいたのですが、現在の病院に入院できることになったので、そちらをキャンセルしたということがあります。

野中　では、退院後の行き先として施設も選択肢になりうるということですね。

Yさん　なりうると思います。そのあたりの話は息子さんとはまだしていませんが――。

発言　年齢的に超高齢の方なので、どのように人生を閉じていくかも重要なテーマのような気がするのですが――。

野中　とても大事な点です。どのように最後の時間を過ごしたいかといった話は聞いていますか？

Yさん　「もう死んでしまいたい」といったようなことは時々おっしゃるのですが、具体的にどのように最後の時を過ごしたいかということは考えておられないような気がします。

野中　いや、そんなことはないでしょう。なんといっても94歳ですから。おそらく毎日考えていると思いますよ。遺書は書いていますか？

Yさん　いえ、書いていません。

野中　利用者の最後の時間をどう演出するかは、ケアマネジャーの仕事の範囲です。ふつうの友達関係では、とても死をどう迎えるかという話はできませんが、ケアマネジャーであれば、特にこのような超高齢者の場合、そこまで踏み込んで支援をしていく必要があります。超高齢者で褥瘡ができたということは、ターミナルも視野に入れて援助を行う必要があるというサインですよね。

Yさん　はい――。

具体的な対応策を考える（手立て編）

野中　ここまでのやりとりで、ご本人を中心とした一家の状況が少しずつ見えてきました。94歳の超高齢者のお母さんが褥瘡治療のために入院中。退院後は在宅に戻りたいと思っている。主介護者だったお嫁さんが1年前に亡くなり、息子が介護の主体者となった。その息子も70歳を超え、てんかんの持病をもっているので体力的に不安がある。ヘルパーには手伝ってもらいたいが、医療系のサービスはお金がかかるので拒否的。食事も買うより自分で作ったほうが安いと思っており、お母さんの入院前はかなりの時間をかけて食事作りをしていた。妹が隣の市に住んでいて、病院には毎日のように見舞いに来ている。孫もおばあちゃんの心配をしているが、息子は彼女たちに介護を手伝ってもらう気はない。だいたいこんな状況のようですね。

　では、このあたりで、今後具体的にどう支援をしていくか、プランニングに移っていきましょう。ア

イデアを出してあげてください。

在宅復帰後のケア

発言　在宅に戻った場合、手すりの設置などの住宅改修をする必要はないのでしょうか。

Yさん　入院前から、食堂に移動する動線など必要な箇所には手すりを付けています。ただ、ご本人の身体状況が大きく変化していれば、さらに考える必要があるかもしれません。

発言　ご本人が気に入っていたデイサービスに、また通っていただく。

野中　檜風呂のデイね（笑）。

発言　息子さんの食事作りについて見直す必要があるのではないでしょうか。

野中　そうですね。ぜひ一度コンビニを見てもらいましょう（笑）。

発言　栄養士のお孫さんに献立をつくっていただくことはできないでしょうか。

野中　いいアイデアですね。おばあちゃんも喜ぶんじゃないでしょうか。

退院前カンファレンス

発言　病院で褥瘡が治って退院したとしても、元の生活のままでは再度褥瘡が発生するリスクは高いと思います。在宅で生活をするのであれば、訪問による医療系サービスは欠かせないと思うのですが。

野中　そうですね。このケースでは、医療系のケアが入らないと、とても在宅生活を支えていくことはできませんよね。必要なことは明確に言う。それも専門家の責任ですよ。

Yさん　わかりました。

発言　在宅に戻ったときの寝具をどうするかや、現在洗面所まで移動して行っている義歯の洗浄をどうするかなどは、退院時のご本人の身体能力等によって変わってくると思います。ですので、まずは病院のＰＴ等に入院中のリハビリの状況を確認し、できれば自宅の状況を見て評価をしてもらった上で退院時の目標レベルを設定してもらうと、よりスムーズに在宅生活に移行できるのではないでしょうか。

野中　そうですね。退院後の行き先がどこであれ、リハビリ職による評価は重要ですね。この病院のＰＴ・ＯＴはそういったことをしてくれそうですか？

Yさん　働きかければ大丈夫だと思います。

発言　その関連で言うと、リハビリ職だけではなく、主治医や看護師、ＭＳＷなどもまじえた退院カンファレンスが開けるといいなと思いました。

野中　それは理想ですよね。できそうですか？

Yさん　主治医や師長にお願いしてみないと何ともいえませんが、できるだけ開いていただけるように話をしてみたいと思います。

長男へのケア、家族会議

野中　ほかにはいかがでしょうか。

発言　息子さんはお母さんの入院前にてんかんの発作を何度か起こしていますし、食事の準備などによるストレスも大きいと思います。また、１年前に奥様を亡くされたばかりで、精神的にも大変な状況にあるのではないかと思います。そういった意味で、レスパイトも含めた息子さんへのケアもしっかりと考えていく必要があるのではないでしょうか。

野中　その通りですね。本当に今のかかりつけ医のままでいいのか、精神的な張り合いはどうか、睡眠

はしっかりとれているか、体重は減っていないか等々、息子さんの状況をしっかりとアセスメントして、息子さんの支援計画を練っていく必要があります。

Yさん　はい、わかりました。

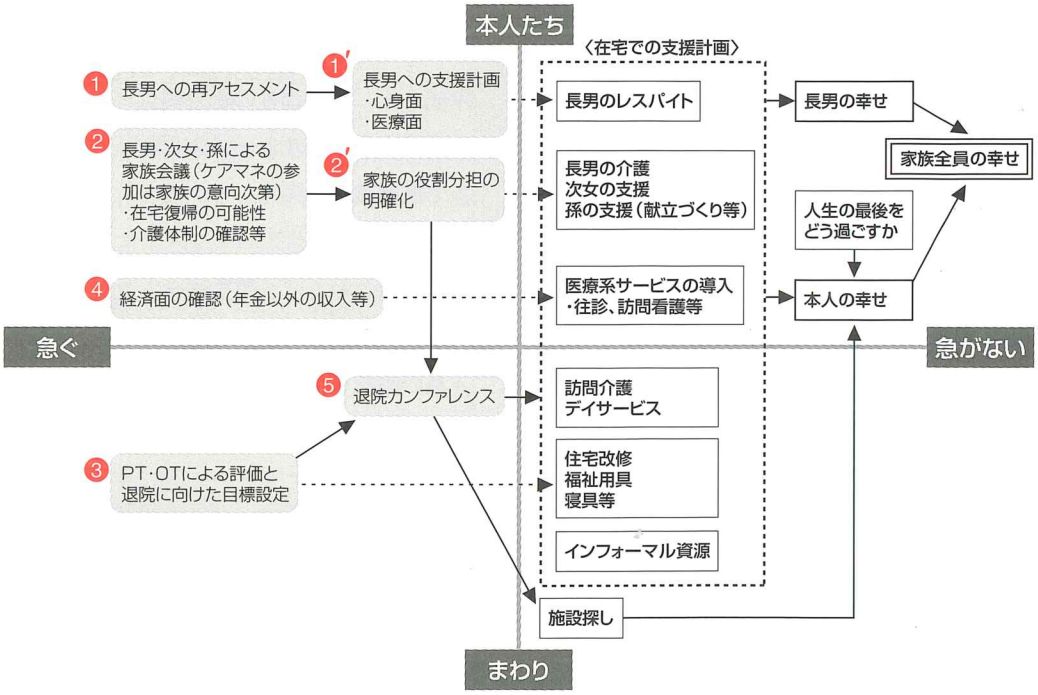
発言　在宅に帰った場合、必然的に外部サービスを導入することになると思いますが、息子さん以外には介護の担い手が考えられないのか、もう一度介護力を確認する必要があるのではないでしょうか。

発言　あわせて経済面についても確認したいです。

野中　どちらも大事な点ですね。家族会議を開くのが一番いいでしょうね。専門家による退院カンファレンスよりもこちらのほうが先ですね。息子さん、妹さん、お孫さんに一堂に会してもらって、お母さんのこれからの生活をどうやって支えていくのか、ご本人が希望している在宅復帰をかなえてあげるとしたら、これまでと同じ体制では褥瘡が再発する可能性が高いし、息子さんの体調にもよい影響はないだろう。そういったリスクを客観的に示した上で、経済的な面も含めて話し合っていただくことが大切でしょうね。

皆さんに出していただいたアイデアをまとめると、だいたい図のようになるのではないでしょうか。できそうですか、Yさん？

Yさん　経済面について聞くのが、どうしても苦手で、年金の20万円のなかで生活したいということを聞き出すだけでもやっとだったのですが……。

野中　いろいろ思い悩むより、ざっくばらんに切り出したほうがいいと思いますよ。「生活を支援する立場としては、その情報を教えていただかないことには手立てを考えられないんです」と。こちらがおどおどしていると、相手も不安になったり不審に思ったりしますからね。多少ハッタリでも、堂々と自信をもって聞くことが大切です（笑）。

Yさん　わかりました（笑）。頑張ってみます。今日はありがとうございました。